オリンピック競技の概況

畔柳峰治郎

A　古代オリンピック競技

1　開催地

ギリシヤ西部エーリス州の中央部を、東から西へ流れるアルペイオス川の河口から約十八km上流に聖地オリンピアがある。

東北には雪をいただいたエリユマントスの峯を仰ぎ、近くクロノス・ピーサの丘が北から東にかけて控え、そのゆるやかな斜面には、アルティスの森が茂り、いちじく、オレンジ・オリーブ、ぶどうなどの樹が美しく丘陵をいろどつている南にはアルプエイオス、西にはクラデオスの静かな流れがある、この小高い丘陵に、古からゼウスの美しい神殿があり、神々の祠、彫像、競技場その他の諸施設があつた、これらを総称してオリンピアと称し、こゝが古代オリンピック競技の行はれた場所である。

2　起　源

起源については、いろいろな神話や伝説がある、ギリシヤの英雄ヘラクレスがペロプスをとむらうため創めたとか、クロノスとゾエウスが角力をして国王を争つたことからとか、いろいろ云い伝えられている。

古くからギリシヤの各都市では祭典行事として競技が行はれていた、それは西歴前一〇世紀頃で、ペロポンネス半島に

アカイヤ族やドーリヤ族が移住してきたときより以前に行われたものといわれているが、ことれは神話的伝説によるもので、起源の詳細は不明である。推定によると、この競技の始めは死者の霊を弔ふために起きたものと思はれる、初めの頃は、地方的な小さな祭であつたが、神に捧げるために行ふようになつてから、次第に大祭になつてきた、そして紀元前六世紀の初め頃ピチヤ、イストミヤ、ネメカ、オリンピヤの四か所で、大競技が行はれるようになつて全ギリシヤ的な規模をもつようになつた。中でもオリンピヤのそれが最も大きくギリシヤ人の生活と最とも深い関係を以つていた。

はじめこの競技は、ピーザ市が管理していたが、エリス市民がこの管理権を奪いとろうとして戦が生じ、一時競技は衰えた、やがて両市の講話が成立して、両市の共同管理下におくことになり、エリスのイヒストとスパルタのリクルゴスが協議し、神慮によつて、久しく衰微していた競技を復活したのにはじまる。これが第一回のオリンピヤ競技で、紀元前七七六年といわれている、この祭典競技から、優勝者は登録されるようになつた。

それからは四年目ごとに夏至後、最初の満月を中心として行はれ、ギリシヤ全土から多数の人々が集つて盛大な競技が行はれた。

祭典と祭典の間の四か年を一オリンピアードと定めた。

3 祭典競技の概況

古代オリンピア競技がどのようにして行れたかといふと、オリンピア競技がいよいよ始まることになると、その数週間前から、三人の布告使が橄欖の冠を持ち、休戦の宣言と祭典の案内のため、エリスを出発して、各都市国家に行くのである、この日から三ケ月はどのような理由があつても戦争は出来ないのである、これをオリンピヤ休戦と云ふ、これは参加する選手や見物人等の往復の安全を守るためであつた、又武力を以つてオリンピヤの聖地を冒すものは瀆神者として罰せられることになつていた、このことは円盤に刻まれ一〇〇〇年後もヘヤの神殿に存在していたといわれる。

このオリンピヤ競技の特徴は宗教的祭典であつたことと、この期間を国際的平和の日としたことである。

4 変　遷

a **発展期**　紀元前七七六―四六八年は発展時代でスパルタが次第に強くなり、オリンピア競技もスパルタの保護によりエリスの主催で行なわれた。参加範囲も段々と広くなり、ギリシヤ全土に及び、オリンピヤ神域は祭事、供犠、宣誓、競技あるいは文化人の発表など行われ充実してきた。しかしこの時代はこれら行事が一日に行われていた。この頃会場で歌われていた、アルキコロスのヘラクレスの歌、ヒピアスの講演、シーモニーデスの勝利の歌などは有名である。

b **全盛期**　紀元前四六三―四〇〇年の間は、オリンピヤ競技の黄金時代で、アテネの全盛と期を一にした、祭典は五日または六日間となり、盛大な祭事と壮麗な競技が展開された、参加国は全ギリシヤは勿論、地中海の殖民地からも、アジヤ、イタリー、エジプトの国国等、ギリシヤ民族の住む、あらゆる国国から選手が出場して、オリンピツクの頂点を示した。そして精神と身体の調和のとれた、人間を最高理想とする、オリンピツク精神を打ち立てた。したがつて君主名士の参加も多く盛大であつた。

シラクサのヒーロン、アテネのアルキビデアスなどが優勝したり、またヘロツドツス、ゴルギアス等の有名な演説のあつたのもこの時代である。

c **衰退期**　紀元前四〇〇―紀元三九三年は衰微時代で、アテネの衰微とともに、オリンピア競技も衰えた、次でマケドニアの勢力下に入ると、ギリシヤの独立は名目にすぎず、また母国の選手の出場も少なくなつた。勝敗に関する観念も誤つた方向え進み、ついに職業的競技者の出現となり、八百長競技の横行となつたのである、ついでローマの勢力下に入ると、ますます競技精神は衰え、オリンピツク競技を地方的の行事としてしまつた、そして紀元三九三年まで、二九三回にわたつて開かれたこの競技も、ついにローマ皇帝、テオドシウスの異教禁止とともに、約一二〇〇年間続いた競技も紀元三九四年全たく禁止されたのである。

5 内　容

a 参加選手　オリンピア競技に参加する選手は、一定の資格が必要であつた、即ちギリシヤ生粋の独立市民で、しかも男子のみ、どれいや、刑罰、神罰を受けたものは除外された、また知、徳、体育が優秀で、一〇ケ月以上ギムナジオンで練習して、エリスの役人の承認したものでなくてはならなかつた。

選手はさらに一定の月にエリスに集合して、審判員の監督の下に一ケ月の間厳格な練習、持導を受けたのち、技能検査を受け合格したものだけが、晴れの大会に出場出来た、この期間中、審判員は絶対の監督権をもち、体罰を行ふことも許された、また怠慢や卑劣の行為で処罰されたものは、「直にこの地を去り己の欲する処に行け」と宣告されるのであつた。選手は不正卑劣な行為をしないことや、祭典の神聖を汚さないことを誓うのであつた、その後、選手はギムナジオンに收容され、一定の規律の下に置かれ自由行動は許されなかつた。

選手の年令は大体一二才から二〇才までと、二〇才から三五才までの二組に分けた、後には一〇才前後の競技も加えられた、

b 審判員　オリンピア競技の初め審判員は、イフイタス一人であつたが、彼の死後はオキシルスの子孫だけが審判に当つていた、第五〇回から審判員は二人となり、第七五回から九人、第一〇三回から一二人、第一〇四回には八人となり、第一〇八回から一〇人となつて、これが最後までつづいた。

審判長が任命されてから、委員長や委員が任命されて、競技会の管理、儀式、プログラムなどをきめられた。

審判員はヒラの泉で祓をしてから、ゼウスの神前に祈り、宣誓を述べてから任務についたのである。すなわち邪心なく公平に審判し、情実で選手を推薦しないことを誓つたのであつた。

c 優勝者　優勝者には橄欖樹の冠とやしの杖が与えられた。この冠はオリンピヤの聖木で、アルテイスの森の中にあるもので、この聖木は、両親のある少年が選ばれ、黄金の包丁で切りとられたものである。これで環の冠を作りり、神前

に捧げてから、審判者より優勝者にさずけられた。優勝者は初めの頃は青銅で作つた三脚倚子に腰を掛けたが、後には黄金と象牙で作つた。机の側にその位置が移された。

ここで橄欖の冠と棕梠の葉を貰い、優勝者の氏名が報告された。

賞品は最初は物質よりも、神聖そのものを尊び、凱旋、歓迎も質素であつたが、回を重ねるとともに熱狂の度を増し、賞は物質的となり、社会も優勝者に厚い待遇を与へ、租税を免除したり、生涯の食事の招待、劇場の無料席、兵役の特典、寄附の軽減等の多くの得典が与へられるようになつた。また優勝者の像はアルテイスの聖地内に建てられ、その費用は、友人、親族、出身地の都市などが負担した。

優勝者が国に凱施したときは、城壁の門を開き、四頭の白馬に引かれた戦車に乗つて入城し、盛大な祝宴が催された。そして月桂冠は氏神に奉納し、勝者の偉勲は詩人や歌人によつて賞された。

d 競技の始めと終り　競技場へ出場するには、先づガウンを着て花輪を飾つた審判員が先頭に立ち、選手は毛であんだ鉢巻をして、これにつゞいた。続いて報告係は競技の開始と、選手名、父の名、都市名などを報告し、掲示板に選手の名を記した。

競技が終ると、審判員は優勝者の氏名や、出身地などを報告し、つゞいて優勝者は表彰された。

e 競技種目　競技はいづれも力量と忍耐と熟練を要するもので、第一回から一三回までは、一九二、二七*m*を走る短距離競走だけであつたが、其後次第に長さを増し一往復、七往復、一二往復、二七往復等の競走が行われた。第二三回ごろから拳闘と戦車競走が加えられ、第六五回ごろから武装競争が行われるようになつた。オリンピヤ競技には、これらの種目のほかに、音楽、詩歌、演劇、弁論、絵画、彫刻、陶器等の競技も行われたのであつた。其後行われた種目の概略は次のようなものであつた。

◇競走　競技の中で最も重視されたもので、走路の長さは種々であつたが、これはスタジアムの長さによつてきめられた

競技者は身体に油を塗り、スタートに立つと出発員のゴー又はラッパの合図によつて、二〇人の走者が同時に出発した。この合図の前に出発したものは失格にさせられた、又この競技には楯、胄、脛当をつけた、武装競争や、松明や葡萄の枝などを持つて競走したこともあつた。

◇五種競技　競走、跳躍、円板投、槍投、角力の五種目でこれを一日で行つた。この競技者は身体のつりあいの美と調和のとれた、身体、体力の持主に限られていた。

◇巾跳　これは走巾跳で、鉛や石で作つた錘を手に持つて跳躍したのである。競技者は平坦な柔かい地床を跳んだのである。片脚だけ前に出したり、倒れたりしてはいけない、両足を揃へて跳ぶのである。

◇円盤投　初めの頃は石製で、直径一〇吋から一二吋位のものが用いられ、後には金属製のものが用いられた。

◇槍投、この槍は人の身長位で、細長い軽い柄の中央に革をつけ、これに手をかけて投げた。また方法には、距離投げと正確投げの二種類があつた。

◇角力　最も古い競技で、競技者は裸体になり身体に油を塗り、その上に砂をつけて行つた。この競技は正しいフオームで正々堂々と相手を攻撃しなければならない。

この競技には、立すもうと、地すもうの二種類があつた。

◇拳闘　当初は手をなめし革のようなものでおほつて行つた。後には手袋を用いるか、手を包むようになつた。

◇戦車競技　戦車競技は古代ギリシヤの葬式のとき行われた競技であつた。

◇競馬　競馬は裸馬で行われた。

◇パンクラテイオン、この競技は拳闘とレスリングとを混合したもので最もはげしい競技で、相当乱暴なことも許された、しかし咬みつくこと、目を突くことだけは禁止されていた。この競技は生命の危険が多く。弊害が伴ふので禁止されたこともあり、追に絶滅して後世に伝わらなかつた。

◇美術、文学、音楽、詩人は詩を、文士は文を、歴史家は史を読んでその努力を一般に示した。建築、絵画、彫刻等の展覧会や、音楽の公開演奏も行われた。

六、古代オリンピック競技の意義

a ギリシャの教育内容である。体育と文芸が国際的舞台に於て互に競はれたことは、ギリシャの教育文化の発展に大きな刺激となつた。特に運動競技が単なる体育、運動としてのみにとどまらず、詩、絵画、彫刻の題材となり、モデルとなり、文芸や芸術の発展に寄与するところが大きかつた。

b この競技は都市国家を単位とし背景として、強い祖国愛の精神に支えられて行はれた競技であり、一面競争相手も等しく、ゼウスやその他の神々を尊崇して行はれた祭典競技であるとともに、純なる血で結ばれた、同一民族であるとの自覚も高められた。

c この競技は教育や文化や、民族団結や、平和に貢献したばかりでなく、副産物として商業の隆盛、交通の発達等をもたらしたのであつた。

B 近代オリンピック競技

一、起　源

一九世紀の中頃、西洋文化の発達とともに欧州各国において、次第にギリシャ競技運動が盛に行はれるようになつたこと、また古代ギリシャの研究が盛になり、オリンピアの遺跡が独逸人のエルンスト・クルチウスによつて一八八一年に発掘され、古代ギリシャの文化と、古代オリンピア競技の豪壮華麗なる全貌が新しくよみがえり近代人の心を刺激したことも近代オリンピック競技の復活の要因である。

提唱者は仏人のピエール・ド・クーベルタンで、古代オリンピックが禁止されてから約一五〇〇年後、クーベルタンの

努力により一八九六年ギリシヤのアテネにおいてオリンピツク競技大会が復活した。以来六〇余年世界各国の参加か次第に増加し、ますます隆盛をつづけている。一七回の大会中、戦禍のため三回、競技大会が中止されたことは誠に残念なことである。

クーベルタンはフランスの政治学校を卒業した、当時フランスがプロシヤとの戦に破れ、国民の士気が衰え、青少年の気風もすたれ、思想的にも混乱したこれをなんとかして、救いたいと念願した。一八八三年イギリスに遊学し、イギリスの学生がスポーツによつて健全な身体や精神を養つていることに深い感銘を受けて母国フランスにこれを移そうと努力しその後競技会も催し「英国教育」の著書も出した。後渡米して体育の研究をつゞけた。

一面古代オリンピアの遺跡が発掘されて、いろいろな事実が明になつて、このオリンピツク競技こそフランスの青少年を救い、世界の平和をもたらすものと確信してその復活をさせようと努力した。一八九四年六月二三日クーベルタンの提唱によりパリーのソルボンヌにオリンピツク復興についての会議が開かれた。この会議は八〇日間継続されて競技規則などが制定され、一八九六年ギリシヤのアテネで、第一回オリンピツク競技大会を開くことを決議した。同時にクーベルタンが中心になり国際オリンピツク委員会（I、O、C）が組織された。彼れは委員長に選ばれ爾来三〇余年その位置についてオリンピツク競技会のために尽瘁した。現在でも六月二三日をオリンピツクデーとして毎年加盟各国で記念行事が行なわれている。

近代オリンピツク大会は、古代オリンピヤ競技の復活されたものであるが、古代競技が神事であり、祭典競技であり、ギリシヤ民族のための競技であつたのに対し近代オリンピツク競技は名実ともに国際競技である。

二、国際オリンピツク委員会（I、O、C）

一八九三年ピエール・ド・クーベルタン男爵は世界各国の競技運動の権威者にオリンピツク競技復活の書状を送り意見を求めたが、その結果は耳を傾けるものは少なく、甚だ頼りないものであつたが少数の熱心な共鳴者を得た、さらに一八

九四年一月二一日、イギリス、アメリカ其他各国のスポーツ団体にオリンピック復活の書状を送つた。同時に彼れはアメリカに渡り、ルーズベルト大統領の支持を懇請し、つづいてイギリス、ドイツ、スエーデン等を歴訪して参加を勧誘した。遂にその努力が報いられ一八九四年六月二三日パリーのソルボンヌ大学に、イギリス、アメリカ、ドイツ、イタリーギリシヤ、スウエーデン、アルゼンチンなど十二か国の代表七九名が集合した、そして全員一致で、その復興を決議した また、この準備統制を図るため、国際オリンピック委員会（I、O、C）を設置することを決議した。そして第一回の国際オリンピック委員会の総会が開かれ、ここに於て国際オリンピック委員会は誕生し、その結成をみたのである。この委員会の主なる使命はオリンピック競技大会の開催、アマチユアスポーツの奨励スポーツを通じて各国のスポーツマンの友好関係の促進を図る等で現在九六の国内オリンピック委員会と、二七の国際スポーツ連盟を公認している。

総会は今までに五八回開かれている。

国際オリンピック委員会の委員は、オリンピック委員会のある国または属領から選ばれ、用語は英語または仏語を話すことが絶対条件になつている。任期は終身、一国から一名または二名選ばれるが米、仏は三名の委員を出している。これらの委員は、その国の代表者ではなく、国際オリンピック委員会が各国に派遣した大使と考へられている。

一九六一年現在の委員数は、会長以下六七名、本部はスイスのローザンヌ市におかれ、事務局長以下が委員会の運営に当つている。またここにはオリンピック博物館があり、オリンピックゆかりの品々が陳列されている。

わが国に派遣された歴代の委員は次の通りである。

嘉納治五郎（一九〇九―一九三八）　岸　清一（一九二四―一九三三）
杉村陽太郎（一九三三―一九三六）　副島　道正（一九三四―一九三九）
徳川　家達（一九三六―一九三九）　永井　松三（一九三三―一九五〇）
高石真五郎（一九三九―現在）　東　竜太郎（一九五〇―現在）

会長は国際オリンピック委員会が選任する。その任期は八ケ年であるが再任を防げない。会長は委員会を代表し、実行委員会の議長となる、歴代の会長は次の通りである。

一代会長　クーベルタン男爵（フランス）　二代会長　ラワール伯爵（ベルギー）

三代会長　エドストローム博士（スエーデン）　四代会長　ブランデージ氏（アメリカ）

会長の下に執行機関として実行委員会がある。そして次のような組織、任務をもつてい。

1 実行委員会は六名の委員で組織され任期は四年で再選を妨げない。

2 実行委員会は委員の中から、国際オリンピック委員会の副会長を互選する。

3 実行委員会は会長の承認を得て、書記長又は秘書をおいて、議事録作成、その他事務をつかさどる。

4 実行委員会は会計事務、記録保存、オリンピック競技の諸規定及び議事決定事項の実施の責任をもつている。

5 実行委員会は国際オリンピック委員会の委員候補者を定め、これを同委員会に選出する。

6 この外評議員会があり各競技の国際連合体の代表者が組織する、会議を毎年開催して実行委員会と協力する。

三、国内オリンピック委員会（N、O、C）

オリンピック大会に参加するためには、その国にオリンピック憲章による、国内オリンピック委員会を作らなければならない。

国内オリンピックの委員会は、その国のスポーツの全国的統轄団体の代表と、その国の国際オリンピック委員会の委員を以つて組織しなければならない。その国の各スポーツの全国的の統轄団体は、その競技種目の国際アマチユア、スポーツ連合体のメンバーであることを要する。わが国では日本オリンピック委員会と呼ばれているが、国によつては、オリンピック協会（カナダ）スポーツ連合（エチオピア）などと呼ばれ名称は必ずしも一致していない。また国内オリンピック委員会はオリンピック旗と表章を使用する権利を認められた唯一の存在である。一九六一年の（N、O、C）総数は九六

ケ国で来る東京大会には九六ケ国が参加する資格をもつているのである。

四、オリンピック競技開催の規則、その他

1 組織委員会

国際オリンピック委員会は、その憲章の権限に従つて、次回のオリンピアード開催の時期及び場所を定めた後、選定された都市のある国のN、O、Cにその組織を依托する。その国は依托された任務を更に自ら選定した特別の組織委員会に委托することが出来る。その権限は競技会の期間終了とともに消滅する。

2 組織委員会の特権と義務

その国の組織委員会は、その競技会に対し責任を有し必要なすべての準備をしなければならない、またこの事業に関連するすべての通信を行いI、O、C実行委員会と協定して後各国に公式の招待状を発送しなければならない。

3 オリンピクク競技会の時期及期間

オリンピヤード第一年目に行はなければならない。どんな理由があつても、この年以外に延期することは許されない。その年のどの時期に行ふかは組織委員会に一任されている。競技会の期間は開会式の日を含めて一六日を越えてはならない。

4 オリンピック都市

オリンピック競技はすべて選定された都市の競技場又は、その近郊で行はなければならない。但し地理的条件上止むを得ない場合は海上競技だけは許される。

5 オリンピックの招待状とその形式

I、O、Cによつて認められた。各国のN、O、Cに宛てて発送されるもので、その形式は「国際オリンピック委員会の指示に従つて〇〇〇〇年のオリンピック競技の組織委員会は何月何日より何月何日まで、××市に於て挙行される競技

に貴国が参加するよう招待する光栄を有する……」印刷物にはオリンピックの回数及び挙行地名を記載しなければならない。

6 オリンピック旗（五輪旗）

オリンピックの旗は白地のふちなしで中央に五つの輪が一定の型に組合されそれぞれ着色されている、色は左から青、黄、黒、緑、赤、の順である、この五つ輪はI、O、C、の公表では世界の五大州を表象している、どの色がどの大陸を示していると云ふことはない、この五色が選ばれたのは当時この六色を使えば全世界の国旗を描くことが出来たからである、五輪についてもう一つ、色別しない場合は斜線や点を使つて五輪を画くことになつている。

一九二〇年アントワープ大会を飾つたこの五輪旗は代々のオリンピック都市に伝えられており、来るべき東京大会でもこの旗が掲揚される、また標語として（より速く、より高く、より強く）と云ふラテン語が一九二六年以来オリンピックの標語として使用されている。この標語と五輪とがオリンピックの正式な表象となつているが、これを商標などに使用することは固く禁じられている。

7 聖火リレー

聖火リレーが近代オリンピックで実施されたのは一九三六年ベルリン大会からであつた。提唱者はカール・デイーム博士でこの時以来競技大会の重要な行事となつている。出発点については特に規定はないが、古代オリンピック発祥の地オリンピヤが出発点に選ばれている。東京大会のリレーのコースについてはシルク・ロードが候補にあげられている。なほ聖火の構想としては一九二八年アムステルダム大会で、マラソン塔上に聖火が点じられたのが最初である。

8 選手村

大会組織委員会は一九五〇年のオリンピック憲章改正以来、男女二つの選手村の設営をはつきりと義務づけられてる、現在のような選手村がはじめて出来たのは一九三二年ロスアンゼルス大会のときであつた。それまではホテルを改造され

た、セントルイス大会や、木造舎屋を小人数の選手団に当てがわれたパリー大会（一九二四年）のような例外は別として各N、O、C、が自力で宿舎を調達するのが建前であった。

選手村が制度化されたことにより、各N、O、Cは宿舎を見つける労力と、その経費が軽識されたばかりではなく、参加選手は国境を越えて交歓する場と、練習と休養に専念する場を与えられた訳である。選手村は大会後それぞれ宿舎住宅等に多く利用されている。

五、オリンピック大会と日本選手の活躍

○第一回オリンピック大会

一八九六年（明治二九年）四月六日より一四日まで九日間ギリシャの首都アテネで開かれた。参加は一三か国で、参加人員は四八五名で、競技種目は一〇種目であった。競技中最も盛大であったのは陸上競技であった、又マラソンは最も熱狂して行われ、ギリシャのルイスが優勝した。

○第二回オリンピック大会

一九〇〇年七月一九日から二六日までフランスの首都パリーで開かれた。参加国は一四か国、参加人員は四二七名であった。種目は二四種目で、この内一八の選手権をアメリカが獲得した。

○第三回オリンピック大会

一九〇四年八月二十九日から九月二〇日までアメリカのセントルイスで行はれた。参加国は一〇ケ国、参加人員は五九五名、その中アメリカ選手が五三一名いた。競技種目は一四種目で、アメリカ選手が圧倒的に強く、陸上競技では二六種目中二四種目に優勝した。

○特別オリンピック大会

この大会はオリンピック復興一〇週年記念と、大会の発展とオリンピック精神の普及を図るために一九〇六年四月二

一日から五月二日まで再びギリシヤのアテネで開催された。

参加国は一九か国、参加人員は九〇〇人余に達し盛大であつた。競技種目は陸上競技、水泳のほかサツカー、綱引、槍投、円盤投等が加えられた、競技成績はアメリカが圧倒的に優勢で、イギリス、スウエーデン、ギリシヤなどがこれにつゞいた。

○第四回オリンピツク大会

一九〇八年七月一八日から二五日まで、イギリスのロンドンで開かれた、参加国二三か国で、参加人員は二〇〇〇人を突破した、競技種目は一四種目で、競技成績はイギリスが三八、アメリカが二二、スウエーデンが七、の選手権を獲得した。水泳は本大会で初めてプールを使用された。

○第五回オリンピツク大会

一九一二年七月六日から一四日まで北欧スエーデンの首都ストツクホルムで開かれた。参加国は二八、参加人員は三二八二名で復興後最初の盛況を呈した。競技種目は近代五種、馬術、サツカーなど加えられ一四種目となつた。競技成績はアメリカが優勢を示し、優勝二六を得、次いでスエーデンが二三を獲得した。この大会は名実ともに近代オリンピツクの典型となり、大成功を收めた。又各種目とも世界最高記録が樹立された。

この大会で日本は初参加し、選手二名を参加させた。それは三島弥彦（帝大）金栗四三（高師）で監督に大森兵蔵ほか嘉納治五郎氏が参加した。三島選手は一〇〇、二〇〇、四〇〇mに出場して予選に破れ、金栗選手はマラソンに出場、途中足痛のため棄権してしまつた。

○第六回オリンピツク大会（中止）

一九一六年ドイツのベルリンで開くことに決定していたが、一九一四年第一次世界大戦が勃発したため競技会を開催することが出来なかつた。

○第七回オリンピック大会

一九一九年四月五日スイスのローザンスで開いたI、O、C、総会に於て第七回大会はベルリーの首都アントワープで開催することに決定した、この大会は一九二〇年八月一五日から三〇日まで行はれ、参加国二九、参加人員二七三一人に達し成功を納めたが敗戦国のドイツとオーストリヤは参加を許されなかつた。競技種目は二〇を越え、オリンピック史上最も多数の種目を行つた、競技成績はイギリスは中距離競走にアメリカは短距離、ハードル、跳躍に強味をみせ、フインランドは長距離競走にそれぞれ優秀な成績を示した。

水泳はアメリカの独占場であつた。この大会から五輪旗が公式に大会旗として使用された。日本は第二回目の参加をして、一五名の代表選手を送つた。この大会に於て日本選手はよい成績を納めることは出来なかつたが、庭球では決勝戦に残り名声を世界にとゞろかした、庭球はダブルスで熊谷、柏尾組が決勝戦にすすみイギリス選手に破れ、第二位になつたシングルスでは熊谷選手が決勝戦で南アのレーセンドと対戦して破れ第二位となつた、期待されたマラソンでは金栗選手が一六着、茂木選手が二〇着、八島選手が二一着、三浦選手が二四着となつた。

○第八回オリンピク大会

一九二四年七月五日より一三日までフランスのパリーに於て開催された、準備万端非常に行き届き、参加国は一躍四四か国となり、参加人員三三八六名の多数にのぼつた、競技成績はアメリカが断然優勢を示した、ドイツ、オーストリヤの参加はまだ認められなかつた。各国選手の為めにオリンピックの村が初めて設けられ、その端緒を開いた。

日本は第三回目の参加をした、陸上競技八名、水泳六名、テニス四名、レスリンダ一名、コーチ二名、マネージャー一名、見学三名計二五名の選手団を派遣した。

その活躍はめさましく陸上競技、水泳、レスリングなどに入賞した。即ち三段跳に織田選手六等、水泳一〇〇m及び一五〇〇mに高石選手が五着、斉藤選手が一五〇〇mに六着、八〇〇mリレーに四着にそれぞれ入賞した。レスリングには

柔道二段の内藤選手が第三位となつた。

○第九回オリンピック大会

一九二八年七月二八日から八月一二日までオランダの首都アムステルダムに於て開催された。参加国四六、参加選手三九〇五名で、ソ連を除き世界のあらゆる国国が参加し、史上空前の盛況を呈した。

この大会ではドイツ、オーストリヤの参加が許され且女子競技が加えられたことは特筆すべきである。又理想的な競技場が建設され、競技技術も科学的に研究し訓練されたため各競技に新記録を出し多大な收獲を得た。

日本は第四回目の参加をし、陸上競技一七名、水泳一一名、ボート八名、ボクシング二名、レスリング一名、馬術四名計四三名の選手団を送つた、日本選手の活躍としては、織田選手は三段跳に一五m二一を跳んで優勝した。南部選手は仝じく三段跳に四等に入賞した。女子選手人見嬢は八〇〇m競走に二着に入賞、木村選手は走高跳に一m八八を跳んで六位棒高跳では中沢選手が三m九〇を越え六位に入賞、マラソンに山田選手が四着、津田選手が六着に入賞した、陸上競技総合で四二か国中第八位の成績を收めた。水泳では鶴田選手が二〇〇m平泳で優勝、一〇〇mで高石選手が三着、一〇〇m背泳に入江選手が四着に、八〇〇mリレーでは二着で入賞し、水泳総合ではアメリカに次で第二位の成績を收め、水泳日本の意気を示した。

○第一〇回オリンピック大会

一九三二年七月三〇日から八月一四日まで、アメリカのロスアンゼルスで開催された、参加国は三七か国、参加人員は一六九六名、この大会の結果はアメリカが断然強く、水泳に於て日本は六種目中五種目に優勝した。

日本は五回目の参加で、選手一三一名、役員六九名の大選手団を送つた。陸上競技男子二五名、女子九名。ボクシング五名、レスリング五名、ホッケー一四名、体操六名、馬術六名、水上競技男子二五名、女子七名、水球九名、ボート一八名、で日本選手は大活躍をした。陸上競技では三段跳びに南部選手が一五m七二跳んで優勝し、大島選手は三段跳に三位

に入賞、棒高跳では西田選手が第二位（四m二八）、望月選手が第五位に入賞、走巾跳では南部選手が三位、一〇〇m競走では吉岡選手が六位に入賞した。馬術では西田選手が大障害に優勝し、ホッケーは第二位となつた。

水泳は前述の如く六種目中五種目、一〇〇m自由型に宮崎選手、一五〇〇m自由型に北村選手、八〇〇mリレー、一〇〇m背泳に清川選手、二〇〇m平泳に鶴田手選がそれぞれ優勝しアメリカを破つた。

○一一回オリンピック大会

一九三六年八月一日より一六日まで、ドイツのベルリンで開かれた、規模の宏大さ、内容の充実に於て理想的で、オリンピック運動もここにおいて最高潮に達した、この大会の参加者四〇〇〇名、種目は前回より多く一九種目となつた。この大会に於て世界記録が二〇、オリンピック記録が一三五と云ふ空前の好成績を収めた。実況はラヂオにより世界に放送され、記録映画（民族の祭典）（美の祭典）も作られた。

日本は第六回目の参加で、二四七名の選手団を送り、一一種目に参加した。

陸上競技に男子四〇名、女子七名、水上競技に男子三五名、女子一〇名、サッカー一六名、ホッケー一四名、ボート一八名、体操八名、バスケットボール一一名、ヨット五名、レスリング五名、馬術五名、ボクシング五名、で、日本選手の活躍は目覚しく、その成績は田島選手が三段跳に一六m跳んで優勝、マラソンでは孫選手が優勝、棒高跳では西田、大江両選手が二、三等に入賞、原田選手は三段跳に二等、其他の選手の奮闘により五三か国中、第四位の成績を示した。水上競技では、一五〇〇m自由形で寺田選手が、二〇〇m平泳で葉室選手がそれぞれ優勝した。八〇〇mリレーでは八分五一秒五の世界新記録を樹立し、女子二〇m平泳では前畑選手が優勝、このほか一〇〇m、四〇〇m、一五〇〇mの自由形に遊佐、新井、鴉藤の諸選手が入賞し、二〇〇m平泳に小池選手が、一〇〇m背泳に清川選手がそれぞれ入賞した。又ホッケーは第二位の成績を収めた。

○第十二回オリンピック大会（中止）

この大会はベルリン大会で開催された、I、O、C総会で一九四〇年九月二一日から一〇月六日まで東京に於て開催される予定になつていた。日本では東京開催が決定すると直に組織委員会を作り準備に着手したが不幸にして一九三七年七月七日、日華事変が起り、事変は益々拡大したので近衛内閣は一九三三年七月オリンピック中止を決定したので一九四〇年第一二回オリンピック大会は遂に中止となつた。

○第一三回オリンピック大会（中止）

この大会は一九四四年イギリスのロンドンで開く予定であつたが、第二次世界大戦の最中に際会したため遂に中止のやむなきに至り、二度つゞけて大会中止となつた。

○第一四回オリンピック大会

この大会は第二次世界大戦が終結し、世界平和の再来と共に、イギリスの首都ロンドンにおいて開くことに決定した。大会は一九四九年七月二九日から八月七日まで、ロンドンのエンパイヤ、スタジアムを中心に行はれた。この大会の参加国は五八か国、選手五〇〇〇人余の参加があつて、大戦後のスポーツ祭典として華々しく開催された。大戦の責任をもつドイツと日本の参加は許されなかつた。またソ連は国内オリンピック委員会が組織されていないため、組織委員会は招待状を送らなかつた。

この大会では一七種目の競技が行はれ、且芸術競技も展開された。成績は水上競技、陸上競技ともにアメリカが圧倒的な強味を見せた。この大会に於ては、第二次世界大戦にあまり関係の少なかつた国々の進出が目覚しかつたようである。戦後日なお浅いにも拘らず、多くの新記録を生み、立派な成績を残して大成功裡に幕を閉じた。

○第一五回オリンピック大会

この大会は一九五二年七月一九日から八月三日まで、フインランドの首都ヘルシンキにおいて開催された。参加国は六九か国、参加選手約五八〇〇名に達し、大会開始以来の盛況を極めた。特にソ連の参加と、アジヤ諸国の参加が目立つ

た。日本は第七回目の参加をし、選手役員合せて、一〇二名を派遣した、然し日本選手の成績は予想外に振はず不成績に終つた。これは十六年間に亘る世界競技界への空白と、世界各国の競技記録が飛躍的に進歩したためと思はれる。日本選手は僅かに、陸上競技女子円盤投に吉野選手が第四位に入賞し、棒高で沢田選手が第六位に入賞、三段跳に飯室選手が六位に入賞した。水上競技に於ては、一〇〇m自由型に鈴木選手が第二位に入賞、同じく後藤選手が第四位に入賞、八〇〇mリレーでは第二位に入賞、一五〇〇m自由型では橋爪選手が第二位に入賞、同じく北村選手は第六位に入賞、二〇〇m平泳に、平川、梶川、長沢の三選手がそれぞれ、四、五、六位に入賞したが、ロスアンゼルス大会や、ベルリン大会に比べ非常に淋しいものであつた。

レスリングは各選手よく活躍し、パンタム級石井選手は優勝し日章旗をかゝげた。なおフライ級の北村選手は二位に入賞、フエザー級の富永選手は五位に入賞、出場選手全員が入賞した。体操では団体で五位に入賞、個入競技総合で竹本選手が二位に入賞、上迫、小野選手が三位に、鍋谷選手が四位に入賞、吊環で竹本選手が六位、徒手体操では上迫選手が二位、小野選手が四位に入賞し世界の注目のまとになつた。其の他の種目はいずれも入賞の圏内に入ることが出来なかつた。

○第一六回オリンピック大会

この大会は一九五六年、オーストラリヤのメルボルで開催された、参加国六七か国、参加選手三一八三名が内女子選手が三七一名であつた。競技種目は一七種目で盛大に挙行された。

日本は第八回目の参加で、選手一一七名、役員四二名計一五九名が参加した。参加種目は一一種目であつた。

日本選手の成績は水泳、体操、レスリングに於ては優秀な成績を示したが、陸上競技及び其他の種目においてはあまり振はなかつた。

水泳では二〇〇m平泳に古川選手が優勝し、レスリングではフエザー級笹原選手とウエルター級池田選手が優勝、体操

では鉄棒に小野選手が優勝し、それぞれ金メタルを獲得し、日章旗を掲げた。第二位には水泳四〇〇m自由型及び一五〇〇自由型に中山選手、二〇〇m平泳に吉村選手、二〇〇mバタフライに石本選手、体操では団体総合をはじめ、個人総合で小野選手、鞍馬で小野選手、徒手で相原選手、平行棒で久保田選手、レスリングではライト級笠原選手が入賞し、それぞれ銀メタルを獲得した。第三位には体操で、鉄棒の竹本選手、平行棒の小野、竹本選手、吊環の久保田、竹本選手がそれぞれ入賞し銅メタルを獲得して体操日本の名声を海外に高めた。第四位には体操、二名、水泳の八〇〇mリレー、ウエイトリフテイング、レスリング、射撃等にそれぞれ入賞した。

第五位にはレスリング、体操に各二名、陸上競技、ウエイトリフテイング、に各一名入賞、第六位には体操三名、ウエイトリフテイングに一名入賞した。

○第一七回オリンピック大会

この大会は、一九六〇年イタリヤの首都ローマで開催された。参加国は八四か国、参加選手五三九六名、内女子選手五三七名で、競技種目は一八種目であつた。この大会は参加選手数において実施種目においても地の利を得てメルボン大会より、はるかに盛会であつた。これ迄の大会の内で最も大きな華かな大会であつたといわれ盛大に挙行された。この大会は日本選手の第九回目の参加で、役員選手合計二一八名の多数が参加した。内役員五〇名、男子選手一四八名、女子選手二〇名であつた。

その成績は体操に於て断然優勢を示し、体操総合で第一位となつた。跳馬で小野選手、徒手で相原選手、鉄棒で小野選手が共に一位となり金メタルを獲得し、日章旗を高く掲げて体操日本の意気を示した。第二位には個人総合で小野選手、鉄棒で竹中選手が入賞し銀メタルを獲得した。第三位には鞍馬で鶴見選手、吊環と平行棒で小野選手が入賞し銅メタルを獲得した。其他第四位に六人、第五位に六人、第六位に四人が入賞した。

水泳においては第二位に二〇〇m平泳に大崎選手、四〇〇m自由型に中山選手、および八〇〇mリレーに入賞し銀メタ

ルを獲得、第三位には一〇〇m平泳に田中選手と四〇〇mメドレーリレーに入賞して銅メタルを獲得した。其他第四位に一人、第五位に一人入賞したのみで往年の成績を挙げることが出来なかつた。

その外ウエイトリフティングに三宅選手が第二位に入賞、木暮選手が第四位に、古山選手が第五位に入賞した。

レスリングでは松原選手が第二位、第四位に平田（フライ級）浅井（バンタム級）佐藤（フエザー級）兼子（ウエルター級）の各選手が入賞、第五位、第六位に各一名入賞した。

ボクシングでは田辺選手が第三位に入賞、射撃で保坂選手が全しく第三位に入賞したが其他の種目においては低調で成績の見るべきものはなく余り振わなかつた。

○第一八回オリンピツク大会

この大会は来る一九六四年日本の首都東京において開催されることに決定している。

オリンピツク大会はI、O、Cが開催する権限をもち主催者なのであるが、実際の組織はI、O、Cが委任した開催国のN、O、C、もしくは、N、O、Cが再委任した特別の組織委員会が当ることになつている。

東京大会は日本オリンピツク委員会（N、O、C）の依頼によつて一九五九年九月にオリンピツク東京組織委員会が発足して、その組織運営に当つている。この委員会は国会、政府、開催地関係者、学識経験者等各界代表を選び構成されている。この外準備を促進するため、政府にオリンピツク東京大会準備対策協議会、文部省体育局にオリンピツク準備室、東京都にオリンピツク準備局が設けられ国を挙げての協力体制が整えられている。

会期は一〇月一一日（日）から一〇月二五日（日）の一五日間が予定されている。

種目は二〇種目に決定され、参加国も九〇か国以上が予想され、参加選手も約八〇〇〇名以上といわれている。これは今まで最も盛大であつた、ローマ大会を凌駕し更に盛大になるものと想像されるのである。

オリンピツク大会がアジアで開催されることは東京大会が最初で、それだけ全世界の期待は極めて大きいものがある。

特にアジヤ諸民族はとかく今までの大会が西欧中心になりがちであつたので、日本の力でオリンピツクを開くことには大きな関心を以つて、大会準備の諸活動を見つめているのである。

東京大会を成功させることは、オリンピツクに新しくアジヤのページを書き加へることになり、誠に意義深いことである。